

NEWS LETTER

2021年5月

幼児日本語教師が専門職として誕生して9年!!

コロナ禍で大変な時期は続いています、皆様、いかがお過ごしでしょうか？

2021年4月で『幼児日本語教師』という専門職が誕生して9年が経ちました。幼児日本語教師が専門職として確立される以前は、日本語教師や幼児教育者、または親御さん達が試行錯誤しながら子ども達に日本語を追加言語として教えてきていました。

弊社が『幼児日本語教師』を専門職として養成するために『幼児日本語教師養成コース』を開発し、開講の準備が整ったのが2012年の4月になります。当時は『幼児日本語教師って何ですか?』という質問が先ず飛び込んできていたのが、現在は『幼児日本語教師』という職種が多くの方に認知されるようになり、「幼児日本語教師になりたい」、「我が子の日本語教育、バイリンガル教育のために幼児日本語教育を学びたい」、「幼児日本語教師に子どもの日本語レッスンをお願いしたい」「学校で幼児日本語教師を探している」という問い合わせに変わってきました。これは、幼児日本語教師養成コースを修了し、幼児日本語教師やアドバイザーとして活動されている皆様の活躍があるからこそ思っております。本当にありがとうございます。

2021年現在、幼児日本語教師養成コース修了生は世界28カ国に広まり、レベルは個々異なりますが、家庭教育の他、海外の日本語教育機関、補習校、幼稚園、インターナショナルスクール、個人のお教室、子育てサークル、日本国内の日本語学校、在日外国人児童の日本語支援教室、NPO団体、インターナショナルスクール、幼稚園、保育園などで活躍されています。中には、学校運営者、個人教室の運営者も複数名あり、KJLTIAの幼児日本語教師養成コースの修了生は、さまざまな場所で活躍されています。

KJLTIAは、幼児日本語教師の養成、資格認定機関になります。が、コース修了生、資格取得後の先生方がより輝いて活動できるように微力ながらもサポートしていきたいと思っております。



幼児日本語教師である自分を見つけてもらうには？

お子様がいらっしゃる方であればお分かりかと思いますが、お子様の日本語教育のために指導者を探すとなれば、やはり無資格で未経験者よりは、有資格者で指導経験がある先生にお願いしたいと思うのではないのでしょうか？それでは、どうやって経験ある資格者を探したら良いのでしょうか？

KJLTIAには、学校関係者以外に個人からも「子どもに日本語を教えてくれる先生を探しているので紹介して欲しい」という問い合わせが来る場合があります。KJLTIAでは、幼児日本語教師の紹介依頼があれば会員リストの中から依頼者様のお住まいの国や地域にいる幼児日本語教師に連絡するという方法を取っています。ただし、幼児日本語教師を探しているという方は、幼児日本語教師がどんなレッスンをしているのか、いまいわからないという方もいます。KJLTIAから紹介してもらえるのは嬉しいけれども、直接やり取りする前にその先生のことが知りたい、お教室の様子が知りたいと思っているだろうな...というのは、やり取りの中でとても感じます。

指導者認定試験に合格したプロフェッショナル認定幼児日本語教師の方々には既にお伝えしていることなのですが、「みなさんが幼児日本語教師です」と知ってもらえない限り、みなさんのところに直接レッスン依頼が入ることは難しいので、窓口を作りましょうと各自で取り組んでいただいています。

お教室を運営されている方、フリーランス(個人)で活動している方、それぞれですが、お教室を運営されている方にはロゴマークとウェブサイト、SNSのアカウント作成の3つ、フリーランスの方はロゴマークやウェブサイトは無くても、SNSのアカウント作成の1つをお勧めしています。これらがいわゆるお店の看板となり広告となり、お問合せの窓口となります。

アドバンスコース開催日程

5月24日: 満員御礼
8月2日: 受付中
10月4日: 受付中

特集

プロ認定幼児日本語教師の活動

オランダの中島祐子
先生のご紹介



事例研究

日英バイリンガル2歳児の
言語発達について

幼児日本語教育
アイデア発表会

開催日: 5月30日(日)
時間: 12:00~(日本時間)
開催方法: Zoom

現在、幼児日本語教師としてレッスンはしていない方もアイデアがある方は、是非、ご参加下さい。子育てサークルなどで「この活動面白かった」というのも歓迎です。指導者に限らず、みんなが参加できるイベントです。

申込みは
ここをクリック

5月KJLTIA会員更新

5月更新月の方は、下記のURLより
お手続きをお願いします。

<https://form.run/@KJLTIA-member>

幼児日本語教師としての活動準備とKJLTIAのネットワークの活用!!

活動準備に必要なことは?

あなたが幼児日本語教師として活動を始める時に、何が必要なのか考えてみましょう。幼児日本語教師養成コースを修了して、お教室を立ち上げる人もいるかも知れませんが、フリーランスというスタイルで個人で活動する人もいます。活動の仕方は人それぞれですが、幼児日本語教師のあなたを見つけてもらうため、あなたの活動を知ってもらうための準備を整えていきましょう。



【ウェブサイト】

これは、ビジネスの看板となるものです。ウェブサイトなんて自分では作れないという方も多いと思いますが、無料でウェブサイトが作れるサイトもたくさん出ており、多くのビジネスがそういう無料ツールを初期段階では使用されています。とてもクオリティーの高い無料サイトも多く、テンプレートに書き込むだけで簡単なものも多いので、そういうところから始めてみるのも良いと思います。

おすすめのホームページ作成サイト: [ホームページ作成 | 無料ホームページ制作ツール | Wix.com](#)

【SNSのアカウント】

多くの方が既に使用されているだろうと思いますが、今はSNSの時代と言われています。一昔、海外在住者の情報交換、コミュニティツールとして『mixi(ミクシー)』がよく使われていましたね。今は、FacebookやInstagramが主流になってますが、皆さんはSNSアカウントをお持ちですか?個人のアカウントを使用するのも1つの方法ですし、ビジネス用として別にアカウントを作成することも可能です。FacebookもInstagramも両方のアカウントを持って運用されている方も多いのですが、Instagramは、Facebookが親会社になるので同じ会社の運営です。両方のアカウントをリンクさせておくと、例えばInstagramで投稿した内容をFacebookにも自動的に投稿されるように設定できるので便利です。

既にお教室を運営していたり、幼児日本語教師としてフリーランスで活動されている方は、レッスンの様子や教材などの写真を投稿するだけでも、活動している様子がわかるので良いと思います。

ブログは、文章を書かなくてもいいですが、SNSは画像と少しのコメントで投稿できる手軽さがあるかと思います。

自分プロデュース

ウェブサイトやSNSのアカウント作成ができたなら、次は『自分プロデュース』です。幼児日本語教師である自分をしっかりプロデュースしていきましょう。

- あなたのアピールポイントは何?
- あなたからレッスンを受けたらどうなの? (他の先生と何が違うの?)
- お教室のアピールポイントは?
- 幼児日本語教師養成コースを修了しているあなたは、どんな指導やサービスの提供ができるの? (このポイントは日本語教師との差別化にもなりますし、無資格の先生との差別化にもなります。)

上記のアピールポイントは、みなさんご自身で考えることが大切です。そして、これは是非ともウェブサイトやSNSのプロフィールに書き込んでおいてほしいです。

準備が出来たらKJLTIAや会員みんなに教えて!!

KJLTIAでは、幼児日本語教師として活動する人たちを応援したいと思っています。また、みなさんの活躍を多くの人に知ってもらいたい。KJLTIAでは、ニュースレターでみなさんの活動を取り上げたり、ブログやSNSでみなさんの活動を紹介していきたいと思っています。また、KJLTIA会員の皆様にも、こうして活動している幼児日本語教師をお互いサポートし合える環境になればと思っていますので、是非、SNSをフォローして頂けたら嬉しいです。他の国で活動している先生のことは関係ないではなく、幼児日本語教師が世界各国で活躍、活動していることを多くの方に知ってもらうことで、やがて皆様個人の活動も知ってもらえることに繋がっていくので、KJLTIA会員のネットワークで盛り上げていけたら良いなと考えています。これは、『SNSマーケティング』とも呼ばれています。

特集: 知りたい! コース修了後の幼児日本語教師の活動

KJLTIAの幼児日本語教師養成コースを修了した方々がどんな活動をされているのか、気になる人をKJLTIAの方でピックアップさせて頂き、皆様にご紹介していきたいと思っています。幼児日本語教師として活動されている方にとっては、他の先生たちの活動って、すごく気になるでしょうし、お互いにとって良い刺激を与えあえる関係になれたらと願っています。

また、お子様の日本語教育のために幼児日本語教師を探しているという方にとって、KJLTIAの幼児日本語教師養成コースを終えた先生方がどこで活動しているのか、見つけてもらえるようになるだろうということも考え、是非、KJLTIA会員の皆様ともお互い協力し合いながら、幼児日本語教師という専門職を世界へ広げていくことに参加して頂けたら嬉しいです。

さて今回は、オランダで活躍されているプロフェッショナル認定幼児日本語教師の中島祐子先生が運営されている『**てらこや@ロッテルダム**』のお教室をご紹介します。

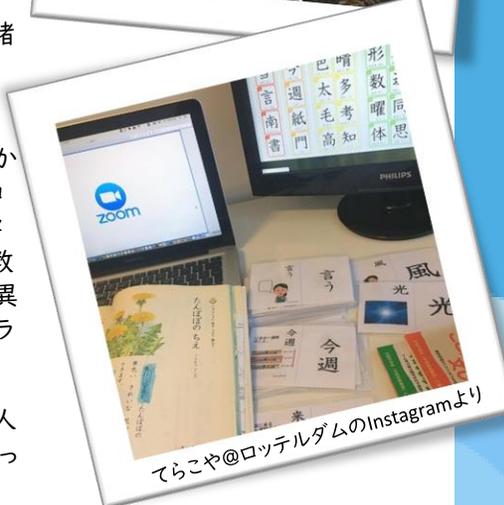
オランダには、日系企業も多く日本語を継承語として学ぶお子様も多いところですが、日本語を継承語として学ぶお子様の中には、いずれ日本へ帰国する帰国子女もいれば、オランダで生まれ育っていく日系国際児(ミックス)がいます。

帰国子女になる子どもは日本語の母国語教育が必要となり、どの年齢で日本に帰国するのはわからないにしろ、日本の学校教育に戻る可能性も視野に入れておかななくてはなりません。一方、日本に移住する予定のないオランダで育っていく子どもは、日本にルーツを持って生まれたということから日本語を継承語として学びます。日本語は子ども達にとって母語ではあっても母国語ではありませんので、オランダの言語と併用しながらその子たちのペースに合わせて一步一步日本語学習を進めていくというのが理想的ですね。

今回ご紹介する『てらこや@ロッテルダム』のお教室は、子ども一人ひとりに合わせたレッスンを心掛けた場所になっています。お教室、授業という、ついつい一斉授業、みんな一緒というのを想像しがちですが、こちらのお教室では、『子ども一人ひとりに合わせたレッスン』を提供されています。

幼児日本語教師が指導する子ども達というのは、日本にルーツがあるという点では同じかも知れませんが、日本語の位置付けが異なるかも知れませんが、家庭環境も異なるかも知れませんが、家庭環境が違えば言語環境だって異なることでしょ。また、年齢や日本語の学習をスタートした時期も違えばレベルも異なります。グループレッソンのメリットも子どもの教育ではたくさんあるので「みんな一緒」という教育スタイルが上手いくときもありますが、異なるバックグラウンドを持つ子ども達が多い幼児日本語教育では、個々に合わせたカリキュラム、アプローチが必要になる場合もあります。

幼児日本語教師のお教室にも色々ありますが『てらこや@ロッテルダム』では、子ども一人ひとりに注目してレッスン提供をしていくという点では、他のお教室と違ったコンセプトになっているのではないかと思います。



日本語を学ぶ、子どもが育つ | てらこや @ Rotterdam

お教室名: 『てらこや @ Rotterdam』

代表/講師: 中島祐子 先生

幼児日本語教師資格レベル: プロフェッショナル認定幼児日本語教師

日本語の位置付け: 母国語教育 / 継承語教育 /

指導年齢: 4歳~12歳くらい

レッスン形態: 個人レッスン、オンライン

*国外からのオンラインレッスンは、時差の調整ができれば可能だと考えています

*コロナ禍の現在、グループレッソンは休止中

Website: [日本語を学ぶ、子どもが育つ | てらこや @Rotterdam \(terakoyarotterdam.net\)](https://terakoyarotterdam.net)

Instagram: <https://instagram.com/terakoyarotterdam>

フォローしてね



中島祐子先生にインタビュー



中島祐子先生
てらこや@ロッテルダムのInstagramより

名言
『日本語習得は
家族プロジェクト』
by 中島祐子

中島祐子先生の考える幼児日本語レッスンとは??



中島祐子先生

“みんなちがって、みんな良し!
日本語習得は、家族プロジェクト♪”

KJLTIA: 本当にその通りですね。日本人の両親を持つ家庭の子もいれば、両親が国際結婚で家庭内に2言語、3言語ある子もいます。中島祐子先生が仰る通り、“みんなちがって、みんな良し!”ですね。

“日本語習得は家族プロジェクト”、うわぁ～素晴らしい名言が出ましたー!! 大人が新しい言語を学ぶ時は、学習者本人が時間とお金を投資して目標に向かっていけるかと思いますが、乳児、幼児、児童期の子ども達の場合は、どうしても大人の導きが必要になります。特に継承語教育の場合は、親御さんと子どもが二人三脚、三人四脚で進めていくものです。そういう意味で日本語継承語教育でいえば子どもに日本語を習得させていこうとするならば、中島祐子先生が仰る通り、家族みんなのプロジェクトとして取り組んでいくことが大切と言えるのではないのでしょうか。子どもだけに日本語の勉強を頑張ってもらうのではなく、「家族みんなでプロジェクトを成功させようよ」っていう中島祐子先生の声掛けは、親御さんにとってとても心強く、一緒に寄り添ってくれる先生だと安心できるでしょうね。

お教室『てらこや@ロッテルダム』のアピールポイントは?



中島祐子先生

それぞれ個別に合ったカリキュラム
で日本語を楽しく学びます。

さまざまな試みから、個人の自主性
をひきだしていけるよう目指します。

KJLTIA: 日本語を学ぶ子ども達というのは、みんな一緒ではありません。多様化している子ども達に1つのカリキュラムで同じアプローチをするということは難しいですね。お教室に来るそれぞれの生徒に合ったカリキュラムで日本語を無理なく楽しみながら学ぶ工夫をされているというのが『てらこや@ロッテルダム』の魅力なのでしょう。

子どもの学びというのは、受け身だけの学習よりも能動的に自分から学びたいという自主性を引き出していけるようなアプローチというのが必要になるので、中島祐子先生はそういうところもしっかりおさえて取り組んでいることが素晴らしいですね。



てらこや@ロッテルダムのInstagramより



てらこや@ロッテルダムのInstagramより

KJLTIA: 幼児日本語教師協会



てらこや@ロッテルダムのInstagramより



てらこや@ロッテルダムのInstagramより

その他、お子様の日本語教育に奮闘する親御さんに伝えたいことはありますか？



中島祐子先生

「おうちで、取り組むのは誰だって難しい。一緒に、たのしく日本語の勉強をやってみませんか？」

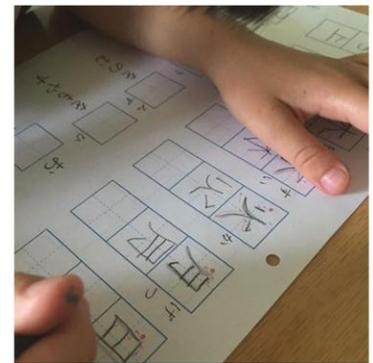
KJLTIA: お子様にとって最初の先生というのは、ご両親である親御さんになると思います。ご自身の子どもに勉強を教えることは難しいものです。また、たとえ日本人の親御さんで日本語ネイティブであったとしても、親御さんが日本で学んできた教育と、オランダで生まれ育つ子ども達が日本語を学ぶ環境は異なります。家族みんなで取り組むのが継承日本語教育と言いつつも、それを家族だけ、おうちだけで取り組むのは大変なことです。

中島祐子先生の言葉を借りて言うならば、幼児日本語教師は日本語学習の家族プロジェクトを成功に導くコンサルタントでもあり、リーダーになっていくことで、幼児日本語教師とご家族みんなで同じ目標に向かって一緒に一步一步進んでいけるということではないでしょうか。それを『家族プロジェクト』という言葉で表現されているのかなと感じました。

幼少期から始めた語学学習は、継続させることが一番大切です。学習者である子どもがゆっくりじっくり焦らずに日本語学習を続けていけるよう、親御さんも幼児日本語教師も協力し合いながら続けていけると良いですね。



てらこや@ロッテルダムのInstagramより



てらこや@ロッテルダムのInstagramより

昨年から続くコロナ禍でお教室に何か変化はありましたか？

コロナ以前は、グループレッスンのみだったのがコロナをきっかけに、個人レッスンや、zoomレッスンなどシフトチェンジでき、スタイルの幅が広がり、逆に私にとって非常によい環境になりました。自分の研究も、じっくり腰を据えて一人一人の生徒さんに向き合うことで、「なにがこの子には必要なのか」などいろいろわかり、まさに親御さん、子ども、自分の、三位一体のプロジェクトのような感じです。

コロナにて、自分のやりたいことが明確になり、グループでトリミク的なことよりも、もっと個人のコアな部分を掴み、家庭みんなでその子どもさんの継承語を楽しみながら定着アップさせることに集中したいとはっきり判りました。幼児日本語教師と親御さん、子どもが同じ方向を向けるので、宿題のやり方や取り組み方、おうちでの生活ヒントなどほんとうに楽しくよく実践してくださり、過大評価でもなく成果がめきめきとあがっています。中には、補習校へ行っている生徒さんのボトムアップの子もおり、日本語で苦しんでしまう子供や家族は絶対に健全ではない、その信念がやっと今になって、形になってきましたので、過酷な状況からこぼれてしまう子供たちの受け皿にもなれればと切に思います。どうか自信喪失するまえに、出会えればと思います。



中島祐子先生

幼児日本語教師としての活動を振り返ってどうですか？



中島祐子先生

長い間実践と研究、試行錯誤をしながらやっと、小学2年生までの語彙力表現、ポキャブラリー、漢字など含め、4技能のバランスがとれたハーフの子供さんの成長過程の数人分の事例を実際に育てることができ、「さてはて、ほかの低年齢の子どもには、どうやってアプローチすればいいのか?? 当てはめられるところはどれか?」などなど、さらに暗中模索しております。

ここでは、三言語の生活がスタンダードの子どもたちです。早い段階で、子ども達の日本語の根を、楽しく大きく根付かせていくお手伝いができればと思います。

もちろん、自身の情熱さめることなく、取り組めてきているのも、KJLTIAの全コースを受けた影響です。コース終了してからもわからないことが出てきた際には、各分野にて調べては実践し、忘れては思い出し、今に至るという感じです。プラス、同じ志をもった若い同僚さんたちと、現場で叱咤激励をしながら、これも最終ディプロマを取得した醍醐味でもありますので、そこもしっかり人の勉強をさせてもらいながら励んでおります。

KJLTIA: 中島祐子先生は、KJLTIAの幼児日本語教師養成コースを受講される以前から、既に指導者として多くの子ども達に日本語を指導されてきた方です。

どんな指導者も最初は初心者です。最初から上手く指導できる人は誰もいませんね。KJLTIAではプロフェッショナル認定を受ける指導者認定試験の受験条件として100時間の指導経験が必要となります。これをハードルが高いと思う人も多いかも知れませんが、どこの国でもおそらく大学の教育学部や専門学校の指導者養成コースと比べたら100時間の指導経験というのは少ない方です。それでも経験無い指導者よりは、100時間でも指導経験を積んでいる指導者の方が幼児日本語教師を採用する教育機関や保護者にとっては、安心して頂けることと思います。学術的な専門知識だけでは賄えない技術的な面というのは、どうしても経験を積むことが一番の近道となります。

専門的知識なしに経験値だけで何とかなることとそうでないことがあり、幼児日本語教育においては経験値だけでは指導者として指導するには難しい面もあるということが言えるのではないのでしょうか。

指導経験を積みながら少しずつ指導者もレベルアップしていけるものなので、皆さんも子どもの日本語学習と同じで、焦らず一步一步、あなたのペースで指導に励んでいただけたらと思います。

てらこや@ロッテルダムのInstagramより



てらこや@ロッテルダムのInstagramより



中島祐子先生

インスタで、子供のすごい!!をご披露したいのと、だれかの参考にもなればともおもったり、しかしながらどこかで自分を怠けさせないためにやっている感が強くあります。おかげさまで、生徒さんが増えまして、ほぼ毎日活動させていただけっております。

KJLTIA: 集客に繋がっていると早速も成果が出ているというのは素晴らしいですね。『てらこや@ロッテルダム』のInstagramから子ども達の生き生きした表情がたくさん見られます。五感を意識されているのかなというアクティビティも多く、子ども達が楽しみながら日本語を学んでいることが伝わってきます。こうしたお教室の活動を見て、「こういうお教室で子どもに日本語を学ばせたい」と思う親子がお申し込みされると思うので、幼児日本語教師の方から「うちのお教室はこのようなコンセプトでこんなレッスンを提供しています」と先に発信することで、幼児日本語教師と保護者、子どもの適切なマッチングが成立しやすいということに繋がっていきます。

『てらこや@ロッテルダム』のInstagramをみんなでフォローしよう!

他の幼児日本語教師の先生方のブログやSNSには、レッスンのアイデアや教材など色々学ぶ要素がたくさん詰まっています。自分では思いつかないような活動をされている方もいるかも知れません。みんなでフォローし合うことでお互い学び合うことができ、刺激を与えあえるようになると思います。また、お互いがフォローし合うことで幼児日本語教師の活躍をより多くの方に知っていただくことができるようになります。これは、将来的に皆様個人へと戻って来る流れになるので、是非ともご協力頂けると嬉しいです。

家庭だけのバイリンガル(継承語)教育について事例から考えてみましょう!

事例
研究

引用文献

The linguistic development of a Japanese -English bilingual at age two: a case study
York WEATHERFORD

今回使用する研究レポートは英文で発表されているものです。一部を引用し門井が日本語に訳しています。今回の事例では、吹き出しに門井の解説やコメントを加えながら、お届けします。プロの翻訳家ではないので、多少ニュアンスおかしいところがあるかも知れませんが、興味深い研究レポートになっているので、最後まで読んでいただけたら嬉しいです。きっと皆様へ何かを気付かせてくれることでしょう。

【研究レポートの概要】

この研究レポートは、日本で生まれ日本で生活する日英ミックスの女兒(ユキ)の2歳時点における日本語と英語の言語発達について、劣勢言語となる英語(文法、語彙力、日本語と英語の違い、取り組み方)に焦点を当てて観察されたものです。この研究からわかったことは、一言語環境で育つ子どもの言語発達は、その言語が使用されるコミュニティの影響を受けやすいが、たとえ乳幼児期であっても2言語を区別しながら言語発達していることがわかった。

【女兒(ユキ)の背景】

<家族構成>

父親: アメリカ人 母親: 日本人 子供(ユキ): 日米ミックス

<居住地>

日本、京都府

<両親の言語>

- 父親の母語: 英語 (日本語も使用可能)
- 母親の母語: 日本語 (英語も使用可能)
- 夫婦間の会話: 夫婦どちらも第二言語のレベルは高く、アメリカ人夫の日本語力よりも、日本人妻の英語力の方が高いことから、夫婦の会話は英語が多い。しかし、ときどき日本語も混ぜて二言語を使用する。

<家庭内の言語>

- 日本語と英語
- 家庭内では特別に【一人一言語アプローチ】などの言語ルールを設けたりしていない。

<ユキの言語>

生まれた直後から母親から日本語、父親から英語と二言語に接触している。母語は、日本語と英語。

この研究レポートは、日本在住の日本人とアメリカ人夫婦の子ども(ユキ)の言語発達に関するレポートです。ユキは、日本で生まれ育ち、日本語と英語の同時型バイリンガルであるが、二言語環境を与えられているのは家庭内のみ。ユキが2歳の時点では、優勢言語は日本語、劣勢言語は英語と二言語に差が見られた。この研究レポートでは、ユキの劣勢言語となる英語について語彙力、コードミックス、言語の区別、英語への取り組み姿勢に焦点を当てて考察している。

【ユキの言語環境】

- 生後から日本語と英語の二言語環境。
- 生後3か月から保育園で約5時間、日本語で過ごす。
- 英語で接するのは主に父親という時間であり、朝と夕、週末と限られた時間。
- 父親方の両親が日本を訪問する数日間以外、ユキが英語で接する相手は父親に限定されている。
- ユキは、英語のオーディオ教材を使って家庭内で英語に触れる機会を作っている。

<解説>

人とのコミュニケーションの点から見ると、日本語では多くの人とのやり取りが伺えるが、英語に関しては、ほぼ父親のみ。

語彙力の考察

- ユキの言語発達をみたところ、言語のバランスは、日本語の方が英語よりも高い。
- ユキの発した単語数をカウントすると日本語が104語、英語が66語であり、22.3%の差が出た。(7語は英語の外来語で日本語でもよく使われており、この時点ではユキにとってその語彙が日本語と英語のどちらに属するか区別し難いため、両言語それぞれに加算。)
- ユキの使用語彙数の約24%となる20語は、日本語と英語の両言語で理解されている。
- 英語に関しては、名詞の使用が目立つ。
- 日本語に関しては、名詞、動詞、形容詞、副詞が使用されていた。

<解説>

人とのコミュニケーションが多くとれている日本語は、名詞、動詞、形容詞、副詞を使いながら会話されていることが読み取れる。一方、英語は父親のみとのコミュニケーションはあるが、オーディオ教材の影響なのか、ほとんどが名詞に偏っている。

ユキの日本語と英語の語彙数

| | 日本語 | 英語 |
|--------|-----|----|
| 名詞 | 30 | 48 |
| 動詞 | 21 | 0 |
| 形容詞/副詞 | 18 | 4 |

語彙力の考察：なぜ、ユキの英語の語彙力は名詞に偏ったのだろうか？

1) 基本的に子どもは、どの言語でも名詞から習得していく傾向がある。

<解説>

これは、基礎コース内で学んだ【象徴機能】も大きく関係しています。言語習得には『意味するもの』と『意味されるもの』の関係性を理解することがポイントになることは、基礎コースで学習済みですね。この段階では、親御さんの声掛けで示されているものの方向を子どもが見たり、指差したり、その対象物を触ったりしながら語彙を学習していきます。従って、語彙習得の初期段階では名詞に集中する傾向があるというのは、納得できますね。

2) 英語のインプットは、英語のオーディオ教材が中心であり、教材では名詞学習に焦点が当てられている。

<解説>

1)の解説でも理解できるように語彙習得の初期段階では名詞の学習に集中される傾向があるので、英語のオーディオ教材はユキのレベルに適したものだと思います。それでは、もう少し踏み込んで考えてみましょう。

ユキは、一応、毎日英語に触れる機会は維持されています。英語で会話する相手は主に父親、そして英語の語彙学習にはビデオなどのオーディオ教材を使用。極端に言い換えれば、英語のインプットはオーディオ教材、アウトプットは父親との会話になっていると想像ができますね。

3) 日本語では1語で伝えられることでも、英語では文章にして伝えないと伝わりにくいという言語の特性がある。

例) 親が子どもに「座る？」と聞く時に日本語では「座る」の動詞1語のみで通じる。

一方、英語では同じように座ることを子どもに聞く時に「Sit?」では伝わりにくいいため

“Do you want to sit (in your chair)?”と動詞の『Sit』の前後に単語が入り、動詞がどれだかわかりにくい。

<解説>

日本語の方が複雑な表現がたくさんあると言われますが、子どもの言語発達の初期段階では、日本語の方が英語よりもシンプルに伝えることができるという特徴があるということですね。

上記の「座る？」の例と同様ですが、母親と乳児のコミュニケーションを観察していると、母親が「バナナ 食べる?」とか、バナナを子どもに見せて「食べる?」と日本語ではシンプルに伝えていることを多く見かけますね。確かに、英語では、バナナを見せて「Eat?」とは言わないですね。シンプルに伝えたくても動詞だけでは違和感があります。

【研究者が気付いたポイント】

• ユキの日本語は2語文や3語文で話すステージであるが、英語は名詞1語文のステージである。

<解説>

日本で生活しているユキは、日本語でコミュニケーションをとる機会が多いはず。そして、ユキの言語環境を見ると、乳児期から保育園にも通っているので、保育園で先生やお友達と日本語で過ごすことから日本語の習得には大きな影響を受けているとわかります。これはユキに限らず、日本で生まれ育つ日本人の子どもでも同様のことが言えます。

保育士の経験値から、0歳児から保育園で過ごしている子どもと3歳児クラスから入園してきた子どものそれぞれ3歳時点の言語数を比較すると、圧倒的に0歳から保育園に入園した子どもの方が高いというのはわかります。これは、早い段階から多くの人と接触することで、多くの日本語の音に触れる機会が多かったからでしょう。一言語教育であっても、言語の接触する機会の多い少ないによる差が出るのではないでしょうか。

ユキの英語環境に関しては、家庭内と限定されているところがあります。両親が英語で会話をするので、ユキは英語を耳にする機会は少なくはない。そして、父親との会話も英語、オーディオ教材を使った英語学習も取り組んでいます。

しかし、ユキの日本語に比べると英語力は一語文のステージであるというのは、家庭内では一語文だけで通じ合える親子の関係性があるということ、家庭内で使用される英語のバリエーションに限界がある、そして能動的にアウトプットする機会が少ないのではないかとすることも考えられるのではないのでしょうか？

語彙力の考察：なぜ、ユキの英語の語彙力は名詞に偏ったのだろうか？

【研究者が気付いたポイント】

- ユキが使用する英語の語彙は、家庭で使用されている英単語であり、その意味は英語でしか理解していない語である。例) "babuckie" (ゴム製のあひるのおもちゃ)、"boom-boom" (母親の乳房)、bath time, bubble, bicycle, car-carなどの単語は、ユキが家にいる時にしか使われていない。日本人の母親は、これらの英単語をユキと日本語で会話している時でも英語のまま使用している。

<解説>

ユキの母親は日本語ネイティブだが、アメリカ人夫との夫婦の会話は英語で行うため、英語力も高い。彼女も日英の二言語話者であるため、相手が日本語と英語を理解しているという場合、日本語の会話の中に英単語が入るコードミックス(二言語混合)による会話は起こりやすいのかも知れません。

海外在住の方は、コードミックスによる会話をしてしまう人はいると思います。もちろん、私も相手が英語を理解している人であれば日英のコードミックスで会話することはよくあります。しかし、会話の相手が英語がわからない場合、日英のコードミックスで会話することは避けるようにしています。また、日本語を学んでいる子どもに対して、指導者として接する場合にも、コードミックスにならないように可能な限り配慮しています。

乳幼児の言語発達には音が大きなポイントとなると考えると、多くの子どもが親や周囲の大人、お友達の発する言葉を真似て覚えています。真似てほしくないような言葉を突然、子どもが発して驚いたり、汚い言葉をどこからか学んできてしまい、子どもが発するようになったと頭を抱える親御さんもいますよね。

このように子どもが周囲の会話から言葉を学んでいるため、ユキの場合、母親の発する日本語に英語が混ざっていれば、混ざっている英単語が英語か日本語かの区別をする前に、そういうものなのかと誤解したまま覚えてしまうこともあるかも知れない。そうすればユキは母親と同じような話し方をするようになるかも知れないとも考えられます。

コードミックス (二言語混合)の考察：二言語混合で子どもと会話することに影響があるのか？

コードミックス(二言語混合)は、会話の途中で何かを表現する際に適切な単語が瞬時に見つけられない時に、その表現を別の言語で補いながらコミュニケーションをとることであり、子どものバイリンガルでは、二言語混合で会話するのは、よく見られることである。

言語的優勢は、インプットとコミュニケーションが必要であるため、ユキの日本語においては生活するコミュニティ内で日本語が使用されていることから、日本語が優勢であることは驚くことではない。ユキは日本語優勢の傾向が強く、いつも日本語で話している。たとえ父親との会話が英語であっても、ユキは日本語で話してしまうこともある。

ユキのコードミックスは、日本語の文法の中に英単語が入る。"Bicycle やな"(関西弁)。これは、ユキが『自転車』という日本語を知らないため『Bicycle』の英単語で置き換えているとも理解できるが、実際のところ、ユキ自身が『Bicycle』を英語として認識しているのかどうかは、判断できない。

<解説>

これは、子どもが日本語の文章に英単語を混合して会話をする時、子ども自身はその単語が英語なのか、それとも日本語なのかは意識して使用しているのではなく、知っている単語がたまたまそれだったということなのかも知れないということ。要するに判断が難しいということですね。

大人のコードミックスの場合は、会話の中で瞬時に「自転車」という日本語が思い出せなかったから、「Bicycle」の英単語で置き換えて会話をしたということが言えるのですが、子どもの場合はそうとは判断できないということです。

もしかするとユキは、「Bicycle」を「バイスクール」という日本語だと理解しているから日本語の文章の中で普通に使っているだけかも知れないということを研究レポートの著者は見解を示しているのがわかりますね。

鋭いポイントをついているなと思いました。確かに、ユキの母親がコードミックスで「Bicycle」を普通に使ってユキと会話をしているとすれば、「バイスクール」という日本語だとユキが勘違いしたまま学習していてもおかしくないだろうなということに気が付きます。

言語の区別についての考察：いつ頃から子どもは言語の区別ができるようになるのか？

幼少期の子どもであっても自分の中に二言語、三言語などの複数言語が存在していることに気が付いている。先行研究においても、2歳児でさえ自分がバイリンガルであると気が付いていると言うが、その理解の度合いについては年齢の高い子どもに比べると同等の理解とは言えない。議論はされているが、幼少期の子どもであっても、Aさんには英語、Bさんには日本語というように言語を区別して使いこなす能力がある。

【事例】

日英バイリンガル児のジェシーは、1歳9カ月の時点から言語の選択をするようになった。以下は、父と男児の絵本の読み聞かせの場面である。

絵本に出てきた太陽のイラストを指差し「Sun」とジェシーが父親に言う。父親がジェシーに「お母さんは、これを何でよんでる？」と質問すると、ジェシーは「太陽」と答えた。

これは、子どもが英語と日本語という2つ違う言語が存在していることを理解し、さらに誰がその言語を使用するのも理解していることがわかる。

しかし、ユキはジェシーほど言語の区別は理解していなかった。ユキにもジェシーと同じように「ママは、これを何ていう？」という質問をしても理解していない様子。ユキの家庭では、厳しく【一人一言語アプローチ】は採用していないが、母親の言語、父親の言語それぞれを尊重しながらコミュニケーションを取っており、誰がどの言語を使うという区別は理解していないが、ユキは日本語も英語もとても流暢である。

先行研究によると、一人一言語アプローチを家庭で採用していなくても2歳児くらいで2つの言語を音韻的、語彙的、構文的にも違う言語であると区別する能力があるとされている。

<解説>

これは国際結婚をしたご夫婦は、子どもに質問してみたくないのでないでしょうか。夫婦どちらの母国でも無い第3国に居住している方の場合、子どもの言語は3言語環境になることもあるかと思います。また、国によっては母国語と英語が一般的に使用されているような国もあると思うので、そういう多言語環境で育つ子どもが2歳過ぎくらいで、言語の区別がつくようになるというのは、とても興味深いですね。

英語への取り組み姿勢の考察：学習者本人のモチベーションは？

- ユキが英語は日本語とは違う言語だと気が付いた時、ユキは会話の中で無意味な音を発するようになった。こうした意味を持たない音は、ユキの父親やユキが視聴しているビデオ英語教材のキャラクターを真似ているようだった。ユキは、英語のストレス、イントネーション、音韻などを発しているようだ。そして、ユキは、自身が使用している英語のオーディオ教材のことを「ムニウムニユ」と呼び、もしかするとユキにとって英語は、包括的でない変わった言語だと理解したのかも知れない。しかし、ユキが発する無意味な音というのは、もしかするとユキが英語を話せるようになりたいという現れなのではないかとも考えられる。

<解説>

子どもが意味を持たない音を発するようになったというのは、何かのサインかも知れませんね。

ユキは、日本語も英語も両親から継承されていて流暢とは言いつつも、日本語の方が優勢であり、運用能力としても日本語の方が高い。

そして、子どもの言語発達、言語習得の流れからみても、音で聞いたことを真似するという点から言えば、ユキがお父さんがよく発するある音は、英語ビデオのキャラクターも使っているということに気が付き、真似して発するようになったと推測できます。これは、研究レポートの著者も仰る通り、ユキなりの英語への取り組む姿勢のあらわれだと捉えても良いのではないのでしょうか。

ユキは2歳児であり、英語の語彙力は日本語に比べるとあまり高くない。しかし、耳から入った英語の音を真似して英語のアクセント、イントネーション、音韻を発しようとしていて、その音が周囲の大人からすると無意味な音に聞こえているだけのことなのかも知れません。

あくまでも推測でしかありませんが、子どもなりに聞いた音の復唱、発音練習のようなことをしていたのであれば、こうした子どもの小さな変化を見つけた時こそ、劣勢言語や追加言語となる言語を本格的に指導する時期なのかも知れませんね。ユキの場合で言えば英語が劣勢言語となりますが、私たちが指導する子どもの場合は当然ながら日本語です。

英語への取り組み姿勢の考察：学習者本人のモチベーションは？

一般的に親は、子どもが間違った文法や言い回しを使っていた場合、親が直ぐに言い換えを行う。

例) ユキ: 「ママ くつ。」

父親: "Yes, that's Mama's shoe."

ユキの父親は、ユキの日本語を英語で言い換えて伝えていた。

しかし、ユキは、だんだん父親の英語を自分の日本語の基準(自分なりのルール)で訂正、反発するようになった。

【事例】

ユキがビデオの視聴を終えて、父親に「おわった」と日本語で伝えたら、父親は" Yeah! It's finished."と返答した。するとユキは、真剣な顔で父親を見て、再度「おわった」と日本語で伝える。それに対して父親は、" Yeah! It's finished."と返答する。これをお互い数回繰り返した。

この繰り返しは、父親が英語ではなく日本語で返答するまで続いた。父親が日本語で「おわった」とユキに言うと、ユキは頷いて「おわった」と言った。

なぜ、ユキが父親の英語が受け入れられないのか、父親の英語を訂正するのかという理由は不明だが、もしかするとユキが父親の言葉を自分が正してあげているという感覚もあったのかも知れない。

そして、ユキは、会話の中で日本語と英語に違いがあることは理解しているようだ。

<解説>

英語と日本語の言い換えについては、ユキの日本語に対して父親が英語で返答するというのは間違っていないのですが、ユキなりに拘るルールがあったのか、研究レポートの著者が言うように、いつも自分の日本語を父親が英語で言い換えるので、それを真似てユキが父親の英語を日本語で言い換えてあげたのか、そこは何ともわからないところですね。父親が日本語で返答するまでユキが父親の英語の返答を受け入れなかったというのは、ユキが頑固なのか、拘りたい理由があったのか、興味深いポイントです。

結論

ユキは、日英バイリンガルではあるが、日本語が優勢言語となっている。

その理由は、フルタイムで保育園で過ごし、ユキの日本語のモチベーションは、園内の友達とのコミュニケーションから大きく影響を受けていると考えられる。

もう一つの理由は、家庭の言語環境において、『一人一言語アプローチ』をきちんと実践していないとも言えるのではないかな。

さらに、ユキの父親が英語ネイティブであっても日本語を理解しているため、ユキとの日本語の会話に対し、日本語で応じてしまうことが度々見られた。これは、ユキが英語を使って会話しようとするモチベーションを下げることに繋がっている。(しかし、ユキは父親の英語をよく理解している)。

このユキの事例では、ユキは自分流の方法で受動的なバイリンガルになったのではないだろうか。また、言語的な特徴の違いとして、日本語は一語文でも伝えられるというシンプルさがあるのに対し、英語は一語では伝えられず、補足なくてはならない語が多いため、日本語の方が英語よりも学ぶには簡単だったのだろう。

ユキの言語は日本語が優勢言語であると言えるが、ユキの生活、言語環境の中には日本語と英語の二言語があることは間違いない。

今回の検証ではユキ本人が、誰がどの言語を使用しているというような言語の区別ができる能力を見出すことは出来なかった。これは、おそらくユキの周囲には英語だけしか話さない英語モノリンガルがいないことが理由にあげられるだろう。

ユキの劣勢言語(英語)に対する取り組み態度は、まだ発達途中のバイリンガルの段階と言えるでしょう。

前半のニュースレターで紹介したオランダの中島祐子先生から『日本語学習は家族プロジェクト』という名言がでてきました。その家族プロジェクトを成功に導いていくためには、やはり家族だけ、家庭だけで日本語教育を行っていくことが難しいということが、この研究レポートからも読み取ることができたのではないのでしょうか。

家庭内という特定の人物とだけのコミュニケーションだけでは、言葉のバリエーションを増やすことが難しいのかも知れません。これは家族以外の人との関わりがあるか無いかによって、言語の運用力に差が生じてしまうということが言えるのではないのでしょうか。だからこそ、幼児日本語教師が家庭で賄うことができない部分を補ったり、専門的なアドバイスをすることで、家族プロジェクトとしての日本語教育と一緒に成功へと導いていけるのではないのでしょうか。

KJLTIA: 幼児日本語教師協会

ユキの事例を参考に、幼児日本語教師として考えてみよう！

今回取り上げた研究レポートは、あくまでも1つの事例として読んで考えてみてください。家庭でバイリンガル教育を受けている子どもがみんなユキと同じとは限りません。この研究レポートの著者も言っている通り、ユキは発達段階にあるバイリンガルであるため、今後、劣勢言語である英語が上達する可能性は十分にあると考えられます。

また今回のユキの事例からは、まだまだ家庭内でのバイリンガル教育の取り組みについてわからないことが多かったです。ユキが家庭で使っているオーディオ英語教材の使用頻度がどのくらいなのか、その他、母親や父親からそれぞれ絵本の読み聞かせや歌など、日常生活の親子の会話以外に何かアプローチがあるのかというのわかりませんでした。そして、ユキの両親がどのくらいバイリンガル教育に興味を持って取り組もうとしているのかも明らかではありませんでした。

門井の見解ですが、ユキのご両親のような取り組みは、ごく一般的なものではないかと感じます。多くの親御さんはバイリンガル教育の仕方はよくわからないけれども、自己流だったり、知り合いが取り組んでいるのを真似て取り組みながら日々過ごしているのかも知れません。非日本語圏であれば、継承語教育なんていう言葉も知らないし、日本語教育もよくわからないけれども、自分自身が日本人の日本語ネイティブだから、取りあえず子どもに日本語で話し、日本から『しま〇ろう』の教材を送ってもらったり、日本の絵本を時々読んでみたり、日本語の動画をみせたりというのは、私の周りでも一般的に目にする家庭での取り組みです。

色々な親子を見てきたり、事例を読んで感じるのは、家庭だけでバイリンガル教育を行うことは大変だろうなということ。どのご家庭も努力されているし、親子共々、二人三脚、三人四脚で頑張っているのは確かです。しかし、家庭内、家族間だけでは言葉が豊かになっていきにくい環境だろうなとも感じます。

今回のユキの事例からも、人とのコミュニケーションが重要な鍵になるということがわかりました。家庭内でもお喋りが好きな親御さんの子どもは、言語発達が早いな、語彙力が豊富だなと感じることがあります。ですから、家庭内だけでもバイリンガル教育、継承語教育は、できないわけではないと思います。しかし、色々な人とのコミュニケーションの機会があった方が、言葉のバリエーションが増えるだろうなというのは明らかです。

そこで幼児日本語教師が家族以外のコミュニケーションの場を提供するという意味で活躍できるのではないのでしょうか。家族間のコミュニケーションでは、つついコードミックスで会話をすることも多い気がします。しかし、定期的に幼児日本語教師のレッスンを受けたり、幼児日本語教師の開催するイベントに参加して、家族以外の人とコミュニケーションをとる機会を持つことで、日本語の音を聞いて、日本語で話すというインプットとアウトプットの機会を作り、運用能力を伸ばしていく場を提供できるのではないかと思います。

今回のニュースレターでは、オランダで活躍している中島祐子先生のお教室の紹介と先生の幼児日本語教育の考えについて、皆様にご案内させて頂きました。中島祐子先生の名言となる「日本語教育は、家族プロジェクト」。この家族プロジェクトを成功に導いていくために幼児日本語教師は、どのように関わることができるのか、その点を皆さんも考えてみてはいかがでしょうか？

<KJLTIAのLINEグループを使って、みんなでアイデアを出し合ってみよう！

【ディスカッションテーマ】

英語圏であるオーストラリアで国際結婚した日本人とオーストラリア人夫婦に第一子が誕生しました。夫婦共々、バイリンガル教育に興味関心を持っているけれども、全くどうしたら良いのかわかりません。日本人妻の母語は日本語、オーストラリア人夫の母語は英語、夫婦間の会話は英語。

幼児日本語教師として、あなたならどのように関わりアドバイスをしていきますか？



KJLTIAのLINEグループに『Note』を設置するので、そちらに書き込みできるようにします。参加は自由です。幼児日本語教育を学んだ皆さんが、幼児日本語教師としてどういうアドバイスやアイデアを提供できるか、みんなで考えてみませんか。



引用・抜粋文献: York, W. *The linguistic development of a Japanese -English bilingual at age two: a case study*. 立命館言語文化研究17号2巻.

協力: 中島祐子 『てらこや@ロッテルダム』

発行: Kids Japanese Language Teachers International Association (KJLTIA)

著者: 門井美香

発行日: 2021年5月22日